

新潟市議会代表团ロシア訪問報告書

○ 訪問日程 平成29年10月24日（火）～28日（土）

《行程》 10月24日 新潟駅発～東京駅～成田空港～ハバロフスク空港着
在ハバロフスク日本国総領事と会食
10月25日 ハバロフスク市政府表敬訪問
ハバロフスク市議会表敬訪問
ハバロフスク市議会主催昼食会
ハバロフスク市内視察
10月26日 在ハバロフスク日本国総領事館訪問（ブリーフィング）
JGCエヴァーグリーン（日揮株式会社）視察訪問
ハバロフスク空港発～ウラジオストク空港着
10月27日 ウラジオストク市議会表敬訪問
ウラジオストク市政府表敬訪問
ペガスHC（北海道商事株式会社）視察訪問
ウラジオストク市議会による招宴
10月28日 ウラジオストク空港発～成田空港～新潟空港着

○ 訪問団員 団 長 阿部 松雄（新潟市議会副議長）
副団長 金子 益夫（新潟市議会議員）
" 水澤 仁（ " ）
団 員 平松 洋一（ " ）
荒井 宏幸（ " ）
伊藤 健太郎（ " ）
小柳 聡（ " ）
志賀 泰雄（ " ）

随 員 菊地 延広（新潟市議会事務局調査法制課長）
随員・通訳 田村 愛火（新潟市観光・国際交流部国際課主査）

ロシア連邦のハバロフスク市及びウラジオストク市と新潟市とは、それぞれ50年、25年を超える交流の歴史があり、姉妹都市の提携を行っている。

両市を訪問し、相互理解を深めるとともに、友好交流の覚書を交わしている両市議会と今後の各分野における交流や協力関係の発展について意見交換を行うことが、この訪問の目的である。

第1日目 10月24日(火)

○在ハバロフスク日本総領事公邸にて会食

山本広行総領事夫妻と議員8名にて会食が行われた。

はじめに阿部松雄団長の挨拶として、本市とハバロフスク市は50年以上にわたる姉妹都市の交流があること、今回の訪問の目的はハバロフスク市をより深く理解すること、両市の議会による意見交換を行うことであるが、特に本市は農業特区を活かした事業展開を行っており、JGCエヴァーグリーンの野菜温室事業について勉強させていただきたいこと、今後とも相互理解を深め、両市の発展と国際親善に努めたいこと等の話をを行った。

会食中に山本総領事から聞くハバロフスク市現地の話は非常に興味深く有益な情報が多かった。

(以下、山本総領事より)

現在のハバロフスク市は豊かで治安が良くなった。かつてエリツィン政権の頃は街にマフィアもいたが今はいなくなり、女性が夜一人で歩いても大丈夫になった。

物価はジャガイモやタマネギなど日常食べる野菜は安いがチョコレートなど贅沢品は日本並みに高い。野菜の輸入は難しく、生鮮品は行政手続きが煩雑である上に、税関には冷蔵庫がなく留め置かれると腐ってしまう。

ハバロフスク国際空港は現在リノベーション工事が行われている。市街地から15分という好立地を活かし、旅行者だけでなく市民のショッピング施設としての活性化が期待されている。ロシアの通貨であるルーブルが強くなり、ビザの発券要件も緩和され旅行者は増えている。空港における入国審査で一人一人の時間が長く行列ができることが悩ましい。最近では窓口業務に女性を配置するようになったためイメージは以前より柔らかくなった。

プーチン大統領の評価は国内では高い。強権的でありながら民主的な面も持っている。指導者としての能力も高い。また、庶民に近く、庶民を助けるというパフォーマンスに努力をしている。一例では、公開生放送の3時間番組に出演して国民からかかってくる電話での訴えに一件一件丁寧に応えるということも行った。

北朝鮮が核を持ち出すということはロシアにとっても脅威となる。ロシア国内からも北朝鮮に圧力をかけるべきとの意見もある。アメリカが対立している以上、北朝鮮を説得できるのはロシアか中国しかないと見ている。

ハバロフスクとのチャーターの増便と定期航空路の再開について、実はオーロラ航空が興味を示しているが、親会社のアエロフロートからは採算が取れるかを問われている。このように重要なポイントとなる実業界も採算性を重視している。

しかしながら、ハバロフスク市民が日本の中で一番身近に感じている都市は新潟である。それはかつて直行便があり訪れたことがある市民が多いからであり、海もあって山もあって自然豊かな新潟にいい印象を持っている。ハバロフスクには高い山がなくスキーをするために新潟へ訪れる人もいる。

ロシアは医療水準が残念ながら低く、ロシアでは無理だが日本に行けば助かるということも多い。韓国がいち早く医療ツーリズムを仕掛け検査などで実績を挙げている。しかしながら日本ほど医療技術に信頼があるわけではない。だが残念ながら日本側は受け入れ態勢が整っていないのが現状である。大きな壁は通訳不足である。国内で対応できるのは聖路加国際病院くらいである。日本国総領事館ではロシアの人間ドックで問題が見つかり高度医療が必要な場合に日本へ患者を送る支援も行っている。

日本(新潟)企業のロシア進出におけるポイントは、ロシア側のパートナーを見誤らないことと、役所(県、市、総領事館など)のサポートを受けることである。お金よりコミュニケーションが大切である。関心のある人は一度来てみることをお勧めする。

和やかな雰囲気の中で山本総領事から、このように現地ならではの貴重な話を伺うことができ、有意義な時間を過ごすことができた。

第2日目 10月25日(水)

○ハバロフスク市政府表敬

面会者：チェルヌイシヨフ第一副市長（都市経済担当）、イワノワ国際局長 他



はじめにチェルヌイシヨフ第一副市長から我々訪問団に対して歓迎の挨拶があった。「両市 50 年の交流に感謝し、協働の力でこれからもお互いの発展に努めたい。ハバロフスク市の人口は現在 61 万 8 千人である。新型特区により日本でも有名な企業である日揮の野菜温室栽培という成果がある。先般の日ロ沿岸市長会議は今後の交流に刺激となった。今回の議会の訪問は両市の発展のみならず市民の交流促進に寄与すると思われる」といった内容であった。

次に阿部団長より、まず今回の訪問メンバーの紹介を行い、続いてソコロフ市長がたびたび本市を訪れ市民交流を先導していただいていることへ感謝していること、ハバロフスクと本市を結ぶチャーターの増便と定期航空路の再開を期待し関係機関へ要望していくのでご協力をお願いしたいこと、ハバロフスクでは新型特区を活用した事業が盛んなので今回の訪問では J G C エヴァーグリーンの施設を視察させてもらい経済交流の発展を考える参考にしたいこと、両市の友好関係がさらに深まり、市民交流をはじめ観光や経済分野における相互協力が促進されることを願っていること等を述べた。

さらに、チェルヌイシヨフ第一副市長から発言があった。

「ソコロフ市長と篠田市長との友好関係は喜ばしい。両市長の高い権威が両市の発展に繋がることを期待される。チャーター減便は悩みの一つである。実業界と意見交換し興味が高くなることを期待している。ハバロフスク国際空港は近代化への真最中である。チャーター便が増便されればいい刺激となる。新型特区の為に新しい道路も整備した。実業界は新型特区に興味を持ち、先駆的なプロジェクトとして認識している。ハバロフスク国際空港発展の為に、定期航空路復活のプロセスを運営していきたい」など力強い言葉をいただいた。

○ハバロフスク市議会議長表敬

面会者：サフコフ議長、ガブリロワ副議長、チチャエフ副議長 他

サフコフ議長より歓迎の挨拶があった。ハバロフスク市議会は 1994 年に発会し 23 年目を迎える。定数は 35 名である。10%が専業の議員であり、90%は兼業をしている。25～69 歳までの議員がおり、平均年齢は 53 歳である。

阿部団長より、まずもって先月の高橋副市長と訪問した際の議長、副議長からの歓迎に改めて感謝を申し上げた。

今回の訪問により議会として両市の発展のために活動していくこと、永井武弘新潟市議会議長より「サフコフ議長をはじめハバロフスク市議会の皆さんとの交流継続と協力関係の発展を期待している」とのメッセージを言付かってきたこと、ハバロフスクと本市を結ぶチャーターの増便と定期航空路の再開を期待し市議会としても関係機関への要望をしていきたくご協力をお願いしたいこと等の発言をした。



○ハバロフスク市議会との昼食会

サフコフ議長、ガブリロフ副議長、チチャエフ副議長、イワノワ国際局長より昼食会にお招きいただいた。

はじめに阿部団長より御礼の挨拶を申し上げた。新潟市は日本一の大河・信濃川が流れて日本海に注ぎ、鳥屋野潟、福島潟、佐潟、上堰潟といった潟（湖沼）も多く、水の都と称され、また2019年1月に新潟港は開港150周年を迎えるが来年の夏から多彩な記念イベントを計画しており、ハバロフスク市民の皆さんからも、ぜひ姉妹都市・新潟へ観光で訪れていただけることを期待していること、新潟市は日本一の米どころで日本酒の酒蔵も多く、新鮮な野菜や魚介など食材も豊富で豊かな食文化が自慢の一つであるが、こちらで異国の食文化も楽しみたいこと等を話し乾杯をした。

その後、食事を楽しみながら、両議会の出席者全員から順次短いスピーチを行い、交流を深めることができた。

○ハバロフスク市内視察

ハバロフスク市職員などの案内により、コムソモール広場、栄光広場、スパソ・プレオラブラジェンスキー大聖堂、ムラヴィヨフ・アムールスキー通り、レーニン広場等を視察。



第3日目 10月26日(木)

○在ハバロフスク日本国総領事館訪問

面会者：門倉次席領事、鏡ハバロフスク日本センター所長



総領事館門倉次席及び諸富副領事並びにハバロフスク日本センター鏡所長から、ハバロフスク市における経済情勢、国際交流等に関する説明を受けた。

門倉次席領事から、「ロシア極東・東シベリアの魅力」と題して、日露協力事業の概要などの説明を受けるとともに、来年はロシアにおける日本年となるため、ロシアでの事業に積極的に参加してもらいたいとの協力要請があった。

続いてハバロフスク日本センターの鏡所長から、日本企業の経済活動への支援状況などの説明を受け、ハバロフスク市では、姉妹都市50年で培われた人間関係、信頼関係から、他都市に比べものにならないほど、新潟市や新潟県は存在感がある。いつでも、何かあれば日本センターとして協力したいというお話をいただいた。

○「JGCエヴァーグリーン」社視察

面会者：JGCエヴァーグリーン社 五十嵐知之 社長

ハバロフスク新型特区で温室野菜を生産・販売している、日本の日揮（につき）株式会社とロシア企業などとの合弁企業であるJGCエヴァーグリーン社視察。

五十嵐社長から、事業概要などの説明を受け、意見交換の後、同社の中央市場の直売所視察。



【施設概要】

- ・ハバロフスク市郊外の工業団地内にある野菜の温室栽培施設
- ・現在2.5haで80名が働いている。→将来的には10haで180名の雇用を予定
- ・施設の建設費は3億ルーブル（政府からの補助金はなし）
- ・2年目までは赤字、3年目から稼働を増やし黒字化の予定
- ・10ha以上の規模拡大のためには、本社からの出資が必要

- ・緯度が低いため、日当たりがよくなく、日照時間も短いため、暖房代がかかる
- ・野菜の種はオランダから仕入れ、育てている
- ・高所作業車にのり、作業を行なっている
- ・24時間体制でオペレーターが管理している
- ・天井にお湯を流しており、雪を感知すると溶かすようになっている
- ・肥料は巨大タンクから各施設に送り、残った廃液をタンクに戻し再活用している

【宣伝・販売促進】

- ・露地物がでてくるため夏場は休みとなっている。露地物とは敢えて競争しない方針
- ・当初は外国企業ということで、メディアへの露出がかなりあった
- ・現在も外国企業の成功例として広く紹介されている

【マーケットの状況】

- ・極東地域の住民の味の嗜好性が高まっている
- ・中国産より健康意識の高さから日本製が好まれている
- ・ダーチャ（家庭菜園）での自家栽培が一番美味しいという意識あり
※市場で直売所を訪問し、キュウリを実際に購入した市民にインタビューしたが、「自家栽培が一番だと思うが中国産は買いたくないため、日揮の野菜を購入する」との回答を得た

【栽培している野菜の種類】

トマト、キュウリ ※パプリカはまだ収穫に至っていない

【出荷先】

スーパー、レストラン、直売所 → 3つの規格に分けている

【販売状況】

- ・中国産と間違われぬよう、ハバロフスクで初めて袋詰実施
- ・キュウリの店頭販売は、1キロ 200ルーブル、250円/袋

【雇用状況】

- ・エンジニア 6人、農作業 29人
- ・平均月収は5万円
- ・全員正規採用(ロシアでは法律により全員正規採用が義務付け)
- ・ピーク時にあわせ雇用している → 閑散期には人が余るのが課題

【課題】

- ・人をどう使うか
- ・ガス代をいかに抑えるか
→ サハリン経由のガスを買っているが、ロシア他地域ではより安価

【今後の展望】

- ・外食レストランへのお荷拡大
- ・中国など近隣国への輸出・消費者へのネット販売
- ・労働者をどう確保していくか

【所見】

広大なロシアの土地を利用して、大規模な野菜の温室栽培は、大きな可能性を感じるものであった。特に、健康への関心が所得向上とともに高まっている状況では、中国産野菜に比べ安心安全な日本ブランドはより消費者の関心が高いといえる。今後の市場はさらなる発展が期待できる分野であると感じた。現在では、安心安全については、競合があまり存在しない状況であったため、極東近隣の諸外国への輸出も同様に可能性がある。

一方、ロシア特有の課題として、労働者をいかに確保するか、頻繁に変更される規則にどう対応するかなど、超えなくてはならないハードルは多く存在するのも事実である。現地でのビジネス支援をいかに丁寧に行っていくかが、極東でのビジネス展開には欠かせないと感じた。





第4日目 10月27日（金）

○ウラジオストク市議会を表敬訪問

面会者：ブリック議長、チェメリス議員、ヴィクトロフ議員、シュケーヴィチ議員、
デミドワ議員、ポチカノワ経済関係顧問、トルマチョワ市議会組織課長

（ブリック議長より）

市議会の仕事は予算決定、地方財政、地方自治体管理、経済などである。ウラジオストクにとって、秋田、函館、鳥取などと友好関係があるが、新潟市との友好関係は重要なものである。

市議会の活動としては、第五回目の選挙を得ての議会になる。2017年9月10日に選挙が行われ、35名で構成されている。統一ロシア、自由民主党、公正ロシア、共産党、年金受給者の会などの政党から成っている。また、選挙は5年に1回開催される。

5つの委員会が設置されており、予算、経済、地方自治体管理、市所有物の管理、高齢者、幼稚園ら健康保険、住宅、バス運営、公共料金の決定などを協議している。



（質疑応答）

Q. ウラジオストク市議会にとっての現在の課題は何か？

A. 予算決定が現在一番の課題である。また、総合計画を策定中であり、最終決定するのも課題である。加えて、日本とロシアの経済協力も課題である。

経済協力について、同じ海、日本海に接している都市として、相互協力を進めるべきである。例えば、漁業、水産加工などの面での連携も可能性が高く、現在、ウラジオストク市内に日本の協力を得て水産市場をつくる計画が進んでいる。

Q: 医療大学との連携についてどのように考えるか？

A: 医療大学の大学長、国際部長も、相互留学の促進に取り組みたいと言っている。ルースキー島に核医学センターが設立される予定で、ガンの治療なども行われる。

Q:市議会が予算の組み立ても行うのか？

A:決定は行政府である。市議会の予算担当委員会で、審議する。日本の仕組みとほとんど同じである。

Q:中小企業育成はどのように行っているのか？

A:ウラジオストクには中小企業センターがあり、そこが担当している。中小企業には、税制優遇、市所有物の安価な利用などが認められている。

また、大企業が成功することで、経済効果が中小企業にも波及すると考えている。このため、港湾、漁業、造船などの分野の大企業の支援にも力を入れている。

Q:日本企業に求める業種は？

A:森林関係は昔から関係が深い。沿海州の北にあるテルネイレス社は上手く協力できている。日本の加工機材をいれ、住宅用木材をロシアから日本に輸出している。

その他にもハチミツ、酪農、農業などが近年では盛んである。今後は経済、文化、科学などで協力ができればと考えている。特に科学については、ロシア科学アカデミー極東支部があり、高い水準があるので、福島原発事故の解決にも力を発揮できると考えている。

Q:本日の参加者は女性議員が多いが、ウラジオストク市議会での女性議員の割合は？

A:ほとんどが男性である。

Q:人口減少への対策は？

A:私は4児の母である。過去5年では出生数より死亡者数が多く、人口は減少していた。しかし、2年前から景気が上向き始め、少子化に歯止めがかかっている。少子化対策として、住宅施策、奨学金制度などを準備している。また、周産期医療センターができたことで、より出産できる環境が向上している。

Q:医療ツーリズムについての考えは？

A:温泉はロシアでも人気である。観光発展も含めて、医療ツーリズムが進展することを望んでいる。

○ウラジオストク行政府を表敬訪問

面会者：トカチェンコ副市長、クシニール国際関係・観光局長、エリョメンコ国際儀典課長、ルニョワ国際関係・観光局主任専門員

※トカチェンコ副市長がメジョーノフ市長職務代理に代わり出席

(トカチェンコ副市長より)

8月には日ロ沿岸市長会議に参加したが、一番交流が活発なのは新潟である。ソ連時代からの交流でもある。今後は文化、経済など幅広い交流を進展させていきたい。

(クシニール国際関係・観光局長より)

ウラジオストク空港で安倍総理を出迎え、写真も撮影した。一週間は手を洗わなかった。新潟市国際課の貢献もあり、観光交流は順調に進んでいる。本日通訳として参加している新潟市の担当職員は素晴らしい仕事をしている。

今まで観光分野では、日本側のパートナーとの協力について、課題を抱えていた。観光入込客数でいうと、1.中国2.韓国3.日本の順である。中国、韓国とは航空路線も豊富にある。一方、日本とは航空路も限られており、これまでは日本からの旅行者数は少なかったのが実情である。

第2回東方経済フォーラムでは、日本からウラジオストクへの送客強化について、安倍総理から日本側へ指示がなされた。その後、日本旅行業協会（JATA）の訪問団が、ウラジオストクへ視察に来ている。担当者レベルにおける、市内の観光地、ホテルなどの視察も行われている。結果として、今年の旅行者数は、昨年比127%であり、今後のさらなる旅行者数の増加が期待されている。例えば韓国では、旅行者数の増加でプサン等への航空便が増便されている。S7、オーロラ航空などの増便で、人の流れは増加している。日本便についても、沿海地方政府と協力して要請していく。現在、ウラジオストク→日本→韓国をま

わる日程の短いクルーズ船を手配する可能性について検討が進められている。

また、日本からの旅行者の増加のため、日本語を併記したガイドブックを数千部単位で発行し、市内各所に配布したところである。予想以上に反響があり、既に不足している状況のため、増刷の予定である。



(質疑応答)

Q. ガン治療センターが設立されるとのことだが、新潟との協力の可能性はあるか？

A. 医療は重要である。核医学センターにガン治療センターを併設予定である。また、医療ツーリズムは、極東全体から中国、韓国、日本に行く人々を、ウラジオストク行政府としても支援している。

ウラジオストクは自由港があり、外国の医療センターを設置することも可能である。日本企業も医療センターをつくる計画があり、サポートしていきたいと考えている。

○北海道総合商事株式会社 ペガス HC 視察

面会者：ペガス HC 池田英希 代表取締役

日本企業のビジネスマッチングや日本の野菜・食品の輸入などを行っている北海道総合商事がウラジオストクに設立した子会社ペガス HC の池田社長と面談し、事業概要の説明を受け、意見交換後、同社が運営し北海道などの産品を展示・販売しているアンテナショップの視察を行った。



(池田社長よりペガス HC 設立の経緯)

池田社長は 2004 年頃からサハリンのガス事業を手掛けており、ロシアでのビジネスに精通をしていた。そのような中、北海道銀行がロシア サハリンに進出することになり、2008 年頃から同銀行と交流を持つようになった。

2013 年頃ウラジオストクに進出する企業があり、経営を手掛けて欲しいとの依頼から現地法人を設立し、社長に就任をした。日本からの顧客が増えていく中で、北海道銀行からビジネスマッチングがうまくいかないとの相談を受けた事が現在の現地法人を立ち上げる切っ掛けになった。ロシアでは法律の下にあるルールが頻繁に変更されるグレー

な部分がある。市や政府との折衝を上手に行う必要があり、ロシアの商習慣を認識することで対応が可能になる。そこで北海道銀行や北海道の企業が出資をし北海道総合商事が設立され、ロシア法人としてペガス HC が立ち上げられ、ロシアの商習慣に精通した池田氏が代表取締役役に就任をした。

(ペガス HC の主な仕事)

ペガス HC はロシアでの地域総合商社として、北海道と極東ロシアマーケットの商品の輸出入をはじめ、商品代金の決済や企業進出時のコンサルティング業務などを行っている。特に北海道への輸入商品としては、①木材をベトナムに送り加工をして日本へ輸出する木材加工品 ②水産物をベトナムに送り加工をして日本に輸出する水産加工品 ③来年度以降本格化する食用大豆など、加工をしてから日本へ輸入する商品が多数ある。

その他、商社機能として①代金回収リスク等を最小限に抑える取引資金決済機能 ②現地事業へのファイナンスアレンジを行う金融機能 ③現地情報・技術支援と商社機能の組み合わせを行うオーガナイズ機能 ④小口取引を取りまとめ物流コストの低減を目指す物流・流通の最適化を担っている。

(ペガス HC の取り組み事例)

① 野菜工場事業

永久凍土の地に温室を設け現地で野菜を作るプロジェクトを行っている。中国産の野菜は防腐剤や農薬が多量に使用されており、子どもたちの給食にそのような野菜を使用させたくないとの思いから始まった。寒暖差 100 度以上に耐えられる特殊フィルムを 3 層にしたビニールハウスで栽培をし、熱源は天然ガスでお湯を沸かし、完全水耕栽培で野菜を育てている。

② 炭火居酒屋 炎

北海道の食材にこだわった炭火居酒屋 炎をウラジオストクにオープン。現地スタッフを採用し、北海道で人材育成をしている。また駅前という好立地の物件の確保が出来たことは現地のノウハウがある事が大きく影響しているようである。

③ アンテナショップ まんぷく猫

ウラジオストク中央広場から徒歩 2 分、半径 100 メートル以内に市役所、オフィスビルや商業施設が立ち並ぶエリアに出店。実際にお店も視察させていただいた。北海道の企業を中心に食品が販売されている。いきなりの出店や製品卸に躊躇する企業に対しこのようなアンテナショップがあれば販売傾向が掴みやすく現地消費者のニーズを把握できる。



(所見)

ペガス HC の池田社長からはご多忙の中で丁寧にご対応頂いた。ロシアの国民性また行政の傾向など熟知しているが故にロシアが持つポテンシャルを認識しており、「ここ 2~3 年がロシアでビジネスが行いやすい時」との言葉が印象的であった。実際に日露首脳会談で日本政府から 8 項目に渡る協力プランが提示をされた事で、プーチン大統領から高い評価と賛意が表明されており、投資効果が上がる時期に来ていると思われる。

一方でロシアに対し商取引への不安なども日本企業の中には根深く、リスクに目が向きがちである。中国や韓国の法人はリスクだけではなくチャンスを見逃さないという貪欲さがあり海外進出も早いようだ。日本企業にとって、ペガス HC のように一括サポートをしてくれる商社がある事はリスクやロシア進出のハードルを軽減でき、製品の良さを現地消費者にアピールできる事になる。新潟の企業の進出の後押しして下さるそうなので今後連携が深まることを期待したい。

○ウラジオストク市議会招宴

面会者：メジョーノフ市長職務代理、ブリック市議会議長、チェメリス議員、
フォードロフ議員、ボーチン議員、スイソエワ議員、
ボチカノワ経済関係顧問、トルマチョワ市議会組織課長

阿部団長からブリック議長、メジョーノフ市長職務代理に対し、丁重な御礼を申し上げた。特に新潟市には日本最長の河川信濃川があることや、4つの大きな潟があり、水の都とも称されている事、そして日本一の米どころで日本酒もおいしく、魚介類が新鮮であることなど食文化について紹介し、新潟市へ来訪を促された。

祝宴は非常に和やかに進み、双方の通訳を介して対話をする議員、スマートフォンの言語変換アプリを利用して会話をする議員など、言葉の壁を乗り越えた相互理解の祝宴となった。散会の際には全員での記念撮影、一人一人との固い握手など、忘れえぬ出会いのひと時であった。

第5日目 10月28日(土)

○車窓よりルースキー島インフラ整備状況視察と所見



2012年のAPEC首脳会議を機会にウラジオストク市のインフラ整備は大きく進んだ。特にルースキー島は劇的に変わったようで、APECの会場は極東連邦大学になり、宿舎は大学の寮になるなど、APEC終了後の施設利用を考えた展開は見事と言える。大学の広さは総敷地面積80万平方メートルで、1か所に集中した大学のキャンパスとしてはロシア国内において最大規模である。

また、ルースキー島連絡橋は、ウラジオストクのムラヴィヨフ・アムールスキー半島とルースキー島の中の東ボスポラス海峡を跨ぐ高さ324メートルの2本の主塔の間が1104メートルと世界最長の斜張橋である。ロシアの国旗をイメージした3色に色分けされており、とても印象的であった。

ウラジオストクはロシア政府の新しい極東政策であるウラジオストク自由港関連法により優遇税制、規制緩和によって投資・ビジネス環境の整備を進められており、国際的な都市としてその重要度が増している事を、インフラ整備を見ても感じ取ることが出来た。

【総括】

ハバロフスク市のソコロフ市長、サフコフ議長は、長い在職歴の中で何度も新潟市を訪れており、新潟市に対して好印象を持っていただいている。地理的に近い距離にある両市が、様々な機会において交流し、忌憚なく意見を交わす中で信頼関係が生まれ、お二人から姉妹都市交流を先導してもらっていることを実感した。

ウラジオストク市は、2016年6月以降、市長が不在という状況ではあるが、今年8月に新潟市で開催された日ロ沿岸市長会議にはメジョーノフ市長職務代理からご参加いただいております。両市の交流は順調に継続している。日本とロシアの国レベルの連携協力も進んでおり、今回の市政府、市議会との意見交換からも、新潟市との様々な分野において更なる協力発展への期待が感じられた。

今回の訪問では、当方の希望により JGC エヴァーグリーン社、ペガスHC社を視察させていただいたが、新潟市の強みである農業を視野に入れた今後の日露経済交流を考えるにあたり、両社の事業展開に関する説明、実際の野菜温室施設を拝見できたことは大いに参考になった。ご多忙のところ対応いただいた両社、並びに視察を調整していただいた総領事館関係者に改めて感謝を申し上げたい。

また、ハバロフスク市議会からは、2013年に交わした友好交流に関する覚書の追記について、ご提案をいただいた。これについては、今後、双方で協議したいと考えている。

結びに、両市との姉妹都市交流を支えてこられた関係各位に感謝を申し上げ、ロシア訪問の報告とする。